普通でありたい過負荷な異常者

Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
普通でありたい過負荷な異常者

【Ｎコード】
Ｎ１４４８Ｚ

【作者名】
Ｆｅ

【あらすじ】
『普通でありたい』と願う少年は箱庭学園へと入学する。しかし、彼は異常であり過負荷である。彼のこれからの学園生活はどうなるのか！？（作者文才のセンスは１ミリもありません）

プロローグ（前書き）

初投稿のせいか駄文です…

生暖かく見守ってください。

プロローグ

とある学校のグランドで多くの学生が倒れている中、その中心に一人の少年が立っていた。

その少年の手からポタポタと真っ赤な血が下へと落ちていく。

少年の名は『桜島紅葉（さくらじまこうよう）』。

幼少の頃にある事をきっかけに孤独な生活を送っていた。家族に見捨てられ研究所で実験動物または玩具のような扱いを受けてきたのだ。

そんな中一人研究所から抜け出し今まで生きてきた。頼れる人物もいない紅葉は

一人孤独に暮らしていた。

「またか…。」

ポツリと誰にも聞こえないような声の大きさで紅葉は言葉を漏らした。

『普通でありたい』

それが今の紅葉の最も欲しているものだった。しかし、今の紅葉は毎日喧嘩を吹っ掛けられては相手をボコボコにする日々が続いた。金や地位や名誉なんていらない。ただ、普通でありたい。

「これは中々興味深いですね。」

その声の方向へ振り向くと、一人の老人が紅葉に向かって歩いて来ている。

「誰だアンタ？」

「私は箱庭学園の理事長をしている不知火袴といいます。」

そう言い紅葉の顔を見ると満面の笑みとなった。

「「桜島君にはとても素晴らしい才能があります。とても興味深い。」

「何故俺の名前を知っている？」

そう言うと紅葉は少し殺気を放ちながら言い放った。

「まぁまぁ、そう身構えずに、…実は君に提案がありましてね。」

その言葉に不思議に思いながらも、とりあえず聞いてみる事にした。

「単刀直入に言います、箱庭学園に来ていただけませんか？あなたの才能を潰す訳にはいきません。」

「…」

その言葉に少し戸惑いを覚えた。しかし、同時にわずかな喜びが浮きでできた。何せ紅葉は、人に興味を持ってもらえるのは久しぶりなのだから。

「…良いだろう。」

「そうですか！では早速ですｇ「ただし条件がある」…何でしょうか？」

紅葉は袴の目をしっかりと捉えこう言った。

「普通でいられる事、これが条件だ。」

プロローグ（後書き）

初投稿キンチョーしました（笑）

次回は主人公紹介でもしていきます。

主人公紹介（前書き）

設定がすごく長くなりました。

設定作るのって疲れますね（、；ω；、）

主人公紹介

【名前】
桜島紅葉（さくらじまこうよう）

【性別】
男

【容姿】
赤髪で髪を下に下ろしている。（禁書の垣根帝督のような感じ）
目が死んでいて、制服は胸元を開けている。
顔は中の上で善吉より少し背が高いぐらい。

【性格】
普段は大人しい（？）が、自分の邪魔をされると男女問わず容赦無しになる。
面白い事は善悪問わず好きである。
普段から普通の学生として生きてこなかったせいか、的外れな言動が多くいわゆる天然である。

【異常】
『暴鬼（オーガ）』
身体能力の超強化や身体全体の硬質化の能力。
身体能力はめだかの乱神モードを軽く凌駕し、例えどんな攻撃を受けても無傷でいられる皮膚を持つ。

【過負荷】
『素晴らしき世界（マイ・ワールド）』

自分を対象にする相手の異常や過負荷を無効化する。これによって多磨川の『却本作り（ブックメーカー）』や志布志の『致死武器（デッド）』による精神的ダメージも無効化出来る。
また、めだかの『完成（ジ・エンド）』でもコピー出来ないようになっている。

【過去】

生まれて数ヶ月で読み書きをマスターし、両親も最初は我が子の天才ぶりを喜んでいたが次第に気味悪がる。
結果、研究所に売り渡され実験動物のような扱いをされる。
（この影響で過負荷が発生する）
これと同時に幼少の頃のめだか達と接触しており、人生についてめだかに説き興味を持たれる。
度重なる実験への恐怖や両親に対する恨みが積もり、研究所の研究員を虐殺し脱走する。
また、双子の妹がおり妹自身も異常であったが紅葉の二の舞にならぬように嘘を演じていた。これにより、紅葉は妹の事はあまり快く思っていない。

主人公紹介（後書き）

こんな感じですかね。

次回から本編入ります！

第一話、対談（前書き）

初めてこんなに長く書いた！

第一話、対談

～紅葉ｓｉｄｅ～

「ここか…。」

早朝、紅葉は箱庭学園の校門の前に佇んでいた。朝早いにも関わらず多くの生徒が部活の朝練に参加し汗を流している。

『箱庭学園』

そこは１－４組は普通科、５・７・９組は体育科、６・８組は芸術科。それより上のクラスは全員が特待生となっており、１０組は特別普通科、１１組は特別体育科、１２組は特別芸術科、さらに上の１３組には全国から集められた異常（アブノーマル）で構成されている。

そんな中、新たなスキル『過負荷』を持つ紅葉がこの箱庭学園に入学（もとい転校）して来た。

「今度こそ普通の生活が送れるハズだ。」

そう呟き校門を通りグランドを歩いている最中、『ゴンッ！！』と頭に衝撃が走る。ふと後ろを野球の硬式ボールが落ちている。

（これが当たったのか…。）

そう思っていると遠くから走ってくる人物がいた。着ているでそれが野球部だと理解できた。

「おい！大丈夫か！？」

「あぁ、心配ない。」

「心配ないって…！絶対たんこぶ出来t…ない？」

「じゃあな。」

紅葉はボールを野球部員に手渡すとサッサと生徒用玄関に足を進める。

後ろで野球部員が（ °д° ）←こんな顔をしていたが気にしないでおこう。

～理事長室～

「待っていましたよ桜島君。まぁ、ソファーでゆっくりして下さい。」

袴がそう促すと紅葉はソファーに腰を下ろした。

「まずは御入学…まぁ、転校という形ですがおめでとうございます。」

「こちらとしては条件が叶うなら何処でも良いがな。」

「ハッハッハ。そうですか。」

袴は満足そうに笑うと机に複数のサイコロを置いた。

「サイコロ？」

「えぇ。桜島君良ければそのサイコロを振って頂けませんか？」

「怪しいな…。まぁ良いだろう。」

そしてサイコロを握り机の上に転がす。

――――――すると、

サイコロに亀裂が入り粉砕する。

～紅葉ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～袴ｓｉｄｅ～

袴は目を見開き驚愕している。そう、サイコロが粉砕するのは生まれ初めて見たのである。

（まさかこれ程までとは…。やはり私の目に狂いは無かった！！）

「これで良いのか？」

「えぇ。やはり君は素晴らしい才能の持ち主ですよ。」

「フンッ…。」

（彼には悪いですがあの計画の為に働いてもらいましょうか。）

そう考えた袴は紅葉にフラスコ計画のついて教えだした。

「人為的に天才を創り出す計画か…。」

「えぇ、どうです？」

「愚かだな。そもそも天才と言うものは努力の積み重ねで成り立つものだ。」

「ですが桜島君は…」

「黙れ！！」

紅葉がそう叫ぶび机に向かって拳を振り落とす。すると机がいとも簡単に真っ二つとなった。

「俺は…俺は『化け物』だ…。」

そう発言した紅葉の目は元々死んだような目をしていたが、より一層目が濁っていくのが感じ取れた。

「スミマセンでした…。つい浅はかな事を言ってしまいました。」

「…いや、こちらも取り乱した。」

二人の間に長い沈黙が続いた。

「どうですか？この計画に参加して頂けませんか？」

「さっきも言った筈だ。その計画は愚かだと。」

「そうですか。残念d「ただ、興味はある。」…はい？」

「その愚かな計画が本当に成功するのか。興味が湧いた。」

「これは驚きました…。てっきり断られたかと。」

「面白そうな事は善悪問わず好きなのでな。で、どうするんだ？」

「是非参加して頂きたい！君がいれば計画も成功します！」

「分かった。よろしく頼む。」

「こちらこそ。」

二人がそう言うと互いに握手をした。

「忘れていました！実はもう十三組の十三人（サーティン・パーティ）は満席でした。」

「心配ない。」

そう言い放った紅葉は、邪悪な笑みを浮かばせこう言った。

『いずれ潰す』

第一話、対談（後書き）

主人公のキャラが自分でも分からん…。

新感覚ダークヒーローみたいな感じでＯＫにしよう。

第二話、1年1組（前書き）

前半ギャグです。

それではどうぞ！

第二話、1年1組

～袴ｓｉｄｅ～

「ふぅ…。」

袴は紅葉との対談を終えて一息ついていた。あの少年と話す時はどうも神経を使い過ぎてしまう。

（しかしあの最後の言葉…）

『いずれ潰す』

（あの言葉は十三組の十三人（サーティン・パーティ）の誰かを潰し、その席をもらうつもりか？確かに彼になら可能ですね。）

「あなた達はどう思いますか？」

そう言うと袴の後ろから六人の男女がそれぞれ出てきた。

「あいつ中々面白そうな奴だったなぁ。てか、あいつ俺らの事絶対気づいてるぜ？」

高千穂仕種。３年１３組所属。血液型ＡＢ型。験体名『棘毛布（ハードラッピング）』

「今僕の持っている武器で彼を殺すのは無理でしょう。戦わなくても彼の危険さが分かりましたよ。」

宗像形。３年１３組所属。血液型ＡＢ型。験体名『枯れた樹海（ラストカーペット）』

「机叩き割ったぐらいでいい気になっちゃて！今度会ったらＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだね！」

古賀いたみ。２年１３組所属。血液型ＡＢ型。験体名『骨折り指切り（ベストペイン）』

「私は意見を有しない。思うことなど何もない。」

名瀬夭歌。２年１３組所属。血液型ＡＢ型。験体名『黒い包帯（ブラックホワイト）』

「そんな事言ってるけど、改造してやりたいって気持ちが僕には伝わってるよ。でも、僕の『受信感度』を使っても彼の思考が読めなかったよ。」

行橋未造。３年１３組所属。血液型ＡＢ型。験体名『狭き門』（ラビットラビリンス）

「フン！王である俺の前であの傲慢な態度が気に食わん！！」

都城王土。３年１３組所属。血液型ＡＢ型。験体名『創帝』（クリエイト）

「ホホォ、流石が君達は彼の強さが分かっていますね。いやはや、これからどうなるか楽しみですね。」

「それにしても良いの？彼は普通に過ごしたいんでしょ？大丈夫なのかな十三組なんかに行かせて…。」

「…。」

「理事長さん？」

「たぶん大丈夫ですよ？古賀さん。それでは今日は早退させていた

だきます。」

「なぜ疑問系！？絶対行かせた事後悔してる！後、帰っちゃうの！？」

「あの庶民の事だ。今頃怒り狂いながらこっちに来てるだろう。」

「はぁぁぁかぁぁまあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

その声が聞こえたと同時に、理事長室の高級なドアが紅葉の手によってゴミクズとなった。

「ほらな。」

～袴ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～紅葉ｓｉｄｅ～

クソッ！、何が普通のクラスに入れてあげようだ！

教室に入れば無駄にデカい奴がいびき出しながら寝ていた。その事はまぁ許せる。許せんのは黒板に書いてある事だ！

『永久自習』

そう、キレた訳はこの『永久自習』のせいなのである。そして、俺はあのバカ理事長ともう一度話をつけるべく、今一度理事長室に帰って来たが…。

「「「「「「…。」」」」」」

「ん？確かオマエらは…。」

確か俺が袴と話している時に後ろに隠れていた六人組か。

「おい。袴はどこだ？」

「理事長なら早退した。代わりにこの手紙を君に渡せと言われた。」

宗像はそう言うと手紙を紅葉に渡した。

紅葉はその手紙を読み始める。

「拝啓、桜島君。この度は、私の不手際で桜島君に不快な思いをさせてしまってすまない。お詫びとして桜島君には1年1組に移ってもらいます。それでは、さようなら。　　不知火袴より」

読み終えると辺りがシーンとなり理事長室が無音状態となる。しかし、この手紙の意味を理解した紅葉は落ち着きを取り戻した。

「邪魔したな。」

そう言うと理事長室から出て行った。

～紅葉ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～13組の面々side～

「行っちまったな。」

高千穂がそう呟くと、行橋が続くように…

「嵐が通り過ぎたみたいだね…。」

「ON・OFFの切り替えが素晴らしい子だったね…。」

と、古賀が続く。

「フンッ！下らん。」

都城がそう言うと時計台へと向かう。その他の面々もそれに時計台へと向かった。

～13組の面々side　out～

～善吉ｓｉｄｅ～

全く、めだかちゃんもよくあんな事やるよ。２４時間３６５日相談を受け付けるなんて…。俺には出来っこないよ。

「あひゃひゃ、どーしたの人吉くん？」

「不知火か。いやなに少し考え事してただけだ。」

「ふぅん。そういえばさっきの黒神さんスゴかったね。全校生徒を前によくあんな言えるね。人前に立つのに、慣れてるのかな？」

「カッ、ありゃあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ。人の上に立つのになれてんだ！」

「あひゃひゃ、それもそうかもね！でも支持率９８％ってのはスゴいね。」

「まぁ、昔からあんな奴だったからな。もう驚きはしねぇよ。」

そう、あの幼き頃に研究所で出会った、あの赤髪の少年のおかげで今のめだかちゃんがいるし俺もいる。

あの赤髪の少年は今何処で何をしているのか。出来れば会ってもう一度話したい。

「って、聞いてるのぉ？人吉くぅ～ん…。」

「おぅわっ！！」

不知火のその不気味な声で善吉は現実世界に引き戻された。

「悪ぃ聞いてなかった。で、何だって？」

「だから今から転校生が来るんだってさ。」

「転校生？どうしてまたこんな時期に。」

「さぁ？」

そうやり取りしていると担任の教師が教室に入って来た。

「お前ら席につけ――。ほら、そこ女子早く座れ――。」

そう後ろを伸ばす話し方で教師は着席を促した。

「今日はお前らに良いニュースがあるぞ――。何とこのクラスに転校生が来ま――す。じゃあ、早速紹介してもらうぞ――。」

そう言うと、教室のドアがガラガラと開く。

そこにいたのは、背が高く胸元を開けた制服を着た赤髪の生徒が入って来た。

「桜島紅葉と言う。一年間よろしく頼む。」

第二話、1年1組（後書き）

無駄にデカい奴の異常が効かないのは、紅葉の過負荷のおかげです。

良かったね！デカい奴！

第三話、再会（前書き）

それでは第三話どうぞ。

第三話、再会

～善吉ｓｉｄｅ～

「あっ、結構イケメン！」

「そうかぁ？目死んでんだぞ。」

「そこが良いんじゃない。ミステリアスな感じで！」

そうやって周りの生徒が騒ぎだすが、善吉はその話題になっている転校生を見て衝撃を受ける。

（もしかしてアイツは…。）

そう、善吉は幼少の頃に研究所で出会った赤髪の少年と転校生の少年が同じ赤髪だという事に気付く。

「じゃあ、今から質問タイムに入りま――す。失礼な事は聞くなよ――。」

教師がそう言うと先程紅葉の事をイケメンと言い張った女子が質問する。

「彼女っている？」

いきなりその質問かよ！てか、ストレートに聞きすぎだろ！？

「いない…。」

それに続くかのように他の生徒も次々と質問する。

「好きな食べ物は？」

「基本的に全部好きだ。嫌いなものはない。」

「好きな芸能人とかいる？」

「余りテレビは見ないからどんな奴がいるか知らん。」

「何で目死んでの？」

「放っとけ…。」

どうする…。もしかしたら本当にアイツかもしれない。

（一か八か聞いてみるか…。）

意を決して善吉が立ち上がり紅葉に質問する。

「俺の事憶えてる？」

～善吉ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～紅葉ｓｉｄｅ～

「…は？」

思わずマヌケな声が出てしまった。…だが、確かに何処かで見覚えがあるな。

「ほら！まだ小さい頃に研究所で会っただろ！？」

「っ…！」

研究所、その言葉に俺は思わず顔が険しくなる。あの研究所のせいだ。俺の人生が狂いだしたのは！

「おっ、おい。どうなんだ？」

しかし、研究所で会った子供なんてあまり憶えてない…。唯一憶えてるのは待合室にいた2人だけだ。

…ん？もしかしてあの2人の子供なのか？

「もしかして待合室にいた子供か？」

「そうだよ！いや～久しぶりだな！？」

善吉はそう言うと席を立ち、紅葉まで歩くと手を掴み上下に振る。

「俺は人吉善吉って名前だ。元気にしてたか？今度めだかちゃんにも会ってくれよ。きっと喜ぶよ！」

「めだかちゃん？」

あぁ、あの時一緒にいた子供か。今思えばあの子には偉そうな事を言ったな…。

「あの時のお前のおかげで、今のめだかちゃんがいるし俺がいるんだ！」

俺のおかげ…か。俺はただ『人を幸せにする事を目的に生きたらど

うだ？』と言っただけだが。

（まぁ、あの時はまだ人間のクズの部分を知らなかったからな…。）

「どうした？」

「いや何でもない。」

少し感傷的になってしまったな。

「あの――。感動の再会の最中に悪いけどぉ――、もう良いかい――？」

「あっ、すいませ～ん…。」

そう教師に注意された善吉はそそくさと自分の席に戻る。

「じゃあ桜島君の席は――、人吉君の隣の空いてる席ですね――。」

「分かりました。」

紅葉はそう言うと自分の席へと辿り着きイスに座る。

「よろしくな。気軽に善吉って呼んでくれ！」

「あたしは不知火って言うんだ。よろしくね。」

「あぁ、こちらこそよろしく頼む。紅葉で構わない。」

（今までいた学校ではまずあり得ない事だな。ようやく普通に生きられるだろう…。）

そう紅葉は思い、これからの学校生活に少なからず期待をした。

だが、紅葉はまだ知らなかった。この善吉達との出会いが、紅葉の学校生活に多大な影響を及ぼすとは知らずに…。

第三話、再会（後書き）

最後がよくあるドラマみたいな感じになりました…。

能力変更について（前書き）

急で申し訳ございません。

能力変更について

能力変更する点は一つだけです。

まず、主人公の過負荷『素晴らしき世界（マイ・ワールド）』の発動がＯＮ・ＯＦＦを可能にしました。

理由は、安心院の『腑罪証明（アリバイブロック）』を無効化してしまうからです。こうしないと、安心院との絡みが難しくなるので仕方なく変更する事になりました。

また、主人公の異常や過負荷はまだ発展途上で、これからもっと成長する予定です！

もしかしたらまたこのような変更があるかもしれないので、予め忠告しておきます。

また、主人公の過負荷で主人公自身の異常が無くならないの？と、

友人に言われました。ですが、主人公自身の異常が自分の過負荷の影響で消える事はありません。

能力変更について（後書き）

改めてご迷惑おかけして申し訳ございませんm（__）m

第四話、生徒会長（前書き）

長ったらしい文章が続いてしまった…。

文才が欲しいっス…。

第四話、生徒会長

～めだかｓｉｄｅ～

「フム、こんなものだろう。」

この度、晴れて箱庭学園第９８代生徒会長となった黒神めだかは生徒会室の模様替えを終えた後だった。

「部屋はこれで良いとして、後は役員を募るだけだな。」

今の生徒会は生徒会長一人しかおらず他の役員の席は空いたままだった。

（まぁ一人は善吉だと決めている。他の役員は後々増やしていけば良いだろう…。）

めだかはそう考えると生徒会室を出て１年１組へと歩いて行く。

文武両道・容姿端麗・質実剛健・才色兼備・有言実行の完璧超人と謳われている黒神めだかは、生徒会長選挙で大言壮語を放った結果、９８％の支持率を得た大物人物である。

しかし、そんなめだかも幼少の頃に悩んでいた事があった。それは『人生は何を目的に生きるのか？』という事だ。

その時は人生は余り良いものではないと、少なからず思っている節があった。だが、そんな時ある少年と出会った。

その少年は赤髪でどこか不思議な雰囲気を持つ子供だった。めだかは気付いたらその少年に『人生は何を目的に生きるのか？』と質問していた。

すると、その少年は少しばかり考えた後に――――。

『人を幸せにする事を目的に生きたらどうだ？』

その言葉がどれだけ心に響き渡ったか。今のめだかがいるのはその少年のおかげである。

（あの少年には感謝してもし切れない…。）

そうめだかが一人で昔の事を思い返していると、目当ての1年1組へと到着した。

（これではいかんな。気を引き締めねばならん。）

そう思い教室のドアを開けると、めだかに衝撃が走る。

まず目に飛び込んで来たのは、善吉が男子生徒と談笑していた。

しかしその男子生徒は、赤髪で昔感じた不思議な雰囲気を持っていた。

「まさか…。」

そう呟くとその男子生徒へと足を運び出す。

もしかすると…！、もしかするとあの時少年では！？

そう思っていると、いつの間にか男子生徒の後ろにまで歩いていた。

「ん？」

その男子生徒がめだかの気配に気付き後ろに振り向く。

めだかは確信した。根拠は無いがその男子生徒が、あの少年である事に間違いないと。そして――――。

「久しぶりっ！！」

めだかはその男子生徒に抱き付いた。

～めだかｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～紅葉ｓｉｄｅ～

一体何が起きたんだ？

紅葉は今の起きた状況に全く追いていけなかった。後ろから気配を感じ振り向けば、そこには美人な女子生徒がいた。

だがその女子生徒は紅葉の顔を見るなり『久しぶりっ！！』と言い抱き付いてきた。

「誰だお前は？後抱き付くな。暑苦しい。」

だが中々離れようとしない。腕を後ろに回されがっちりとホールドされている。

（いい加減鬱陶しくなってきたな…。殴り飛ばして無理やり離れさせるか。）

紅葉が恐ろしい事を考えていると、善吉が女子生徒を見て仰天する。

「めだかちゃん！？どうしてこんな所に？」

「貴様を生徒会に招き入れようと此処まで来た。だが、こんな所で懐かしい人と再会する事が出来るとはな。」

今確か善吉はめだかちゃんと言ったな…。となると、善吉と一緒に待合室にいた子供か。

「分かったから取り敢えず離れろ。」

「何故だ？そう恥ずかしがらなくても良いのだぞ。」

「恥ずかしくなどない…。」

「なら良いではないか♪」

そう言うとさらに回していた腕に力が込められた。

紅葉は諦める事にし、ボソッと呟いた。

「この学校にまともな奴はいないのか…？」

自身もまた、まともな奴ではない紅葉がそう嘆いた。

第四話、生徒会長（後書き）

紅葉とめだかの初絡みでした。

第五話、勧誘（前書き）

最近までテストがあり、結果は散々でした＼（＾Ｏ＾）／

小説書きながらの勉強は難しいです…。

第五話、勧誘

～紅葉ｓｉｄｅ～

「生徒会？」

「うむ。善吉と一緒に紅葉もやってくれないか？」

ちなみに俺はめだかとの自己紹介はもう終えている。

何故下の名前で呼ぶのかは知らないが…。

「ちょっと待て！何で俺まで生徒会に入らなきゃならん！？」

「何を言うのだ善吉。お前が入るのは決定事項だ。」

「鬼！悪魔！人でなし！！」

善吉気の毒に…。しかし、このままでは俺も生徒会行きではないか？

「善吉は庶務で決まりだ。紅葉はどうするか…？」

「せっかくだが断らせてもらう。」

「何故だ？」

「出来れば普通に過ごしたいんでな。」

これで諦めてくれるだろう、そう思っていたが。

「何を言う。生徒会に入る事は特別ではないぞ。そもそも、学生が生徒会役員になる事は普通ではないか。」

「…。」

痛い所を突かれた…。しかし、何故ここまで誘ってくるのだ？

「黒神は何故そこまでして俺を誘う？」

「めだかで構わん、別に理由などない。ただ…。」

「ただ？」

「紅葉と善吉、私は貴様達の事が大好きだからだ！」

『凜っ！！』という文字が見えてしまうのはたぶん気のせいであろう。

「「いや意味が分からん。」」

「そういう訳だ。早速生徒会室へ行くとしよう。」

「うわっ、引っ張んな！？紅葉何とかしてくれ！」

「もうどうとでもなれ…。」

「遠い目して何言ってんだ！？こうなったら俺だけでも…、って力強くて離れねぇ！」

離せえぇぇぇぇ。と善吉は悲しげな叫びを教室に残し、紅葉と共に引きずられて行った。

「さっきのアタシすごく空気だった…。」

不知火はそう言うと一人隅でいじけていた。

後日、善吉が不知火のご機嫌取りのために焼き肉に行く事となった。

しかし、不知火の暴飲暴食のおかげで財布の中身がうまい棒も買えない金額になり、その夜善吉は枕を涙で濡らす事となった。

第五話、勧誘（後書き）

意見や疑問に思った事があればいつでも聞いて下さい。

次回は本編から外れるつもりです。

閑話?、普通の高校生になるために…（前書き）

本編には関係ありません。

少しばかり紅葉がハジケます。

閑話?、普通の高校生になるために…

～紅葉ｓｉｄｅ～

昼休み、紅葉と善吉は数人の男子生徒と雑誌を見ていた。

「やっぱり○○○ちゃんは良いよなぁ…。」

男子生徒Ａがそう言うと、

「×××ちゃんが一番だけどな。」

男子生徒Ｂがそう反論する。

「何言ってんだ、△△△ちゃんに決まってんだろ。」

最後に善吉がそう告げた。

そう今この４人（正確には３人）はアイドル談義をしていた。

（誰が誰だかさっぱり分からん。）

そう紅葉は普段テレビを見ないせいか最近のアイドルには全く無知なのである。

「紅葉はどの子が良いんだ？」

「そう言われてもな…、これに載っている奴らは全員知らん。」

「マジかよ！？」

「それは高校生としてどうかと思うぞ？」

「それ程深刻ではないだろう。」

「いーや深刻だ！普通の高校生は気になる人が一人いてもおかしくねぇぞ？」

「何だと!?」

その言葉を聞いた紅葉は絶句する。

俺とした事が、自ら普通になる事に逃げていたとはな…。

そう紅葉が一人で勘違いをしていると、ある提案が浮かんだ。

「…善吉。」

「どうした?」

「放課後付き合ってくれ、寄りたい場所がある。」

「どこ行くんだよ?」

善吉が聞くと顔をニヤリとし答えた。

「本屋だ。」

～紅葉ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～古賀ｓｉｄｅ～

「アハハ！やっぱりこのマンガは面白いなぁ。」

そう言うと古賀は店内にも関わらずゲラゲラ笑い出した。

「古賀ちゃん、ここは店内だぜ。」

「あっ、ゴメンね～名瀬ちゃん。ついマンガが面白くて。」

しかし、その名瀬も顔に包帯を巻きナイフが刺さっているという怪しさ全快であった。

「そう言えば欲しい本見つかったの？」

「あぁ、見つかったぜ。」

そう言うと手に持っていた本を古賀に見せる。

『猿でも分かる！楽しい人体解剖！！ｐａｒｔ．３』

「…変わった本だね。ていうか、ｐａｒｔ．３って事は１・２もあるんだ…。」

「俺の愛読書だ。」

そんな会話をしていると、

「何買うんだよ？」

「まぁ待て。ん？アイツは…。」

今何処かで聞き覚えのある声がしたような…。

古賀はその声のする方へ向くと、

「確かアンタは理事長室にいた…。」

（やっぱり…。）

古賀が思っていた通り、その声の主は桜島紅葉であった。

「紅葉のこの人と知り合いか？（ていうか服ヤベーだろ…。）」

「あぁ、俺達の1つ上の学年の奴だ。」

「あっ先輩だったんスか、こんにちわっス。」

「こ、こんにちわ…。」

何であの子（紅葉）がいるの！？絶対本屋とか来なさそーだよ！

「何でお前がいるんだよ。」

名瀬がそう問いただすと、

「本屋に来たのだから本を買うに決まっている。」

本とか読むんだ…。何か意外。

「で？紅葉は何買うんだよ。」

「付いてこれば分かる。」

そう言うと紅葉は店内を歩き回る。

3人が不思議そうに眺めていると、

「見つけた。」

そう聞いた3人は紅葉へと駆け寄る。そこは――――。

「「「グラビアコーナー？」」」

「そうだ。」

すると紅葉は真剣な顔でグラビア雑誌を漁り始めた。

（（（どういう事だ（なの）？））））

3人の考えていた事が見事にシンクロしていた。

閑話?、普通の高校生になるために…（後書き）

続きはいつか閑話?にで出します。

後、作者は古賀ちゃんが好きです。

第六話、生徒会補佐（前書き）

シリアス（？）回です。

第六話、生徒会補佐

～紅葉ｓｉｄｅ～

着いてしまった…。今さらながら後悔してきた。

「では役職を決める。庶務は善吉で決まりだ。」

「拒否権無しかよ！もう好きにしてくれ…。」

「後は紅葉なのだが…、何がしたい？」

「俺は役員にはなりたくないのだが。」

「そう言うな。どうか私に力を貸してくれ。」

そう言うとめだかは頭を下げそう言った。

「力貸してやれよ、こんなに頼んでるんだし。」

「お前は一人だけ役員になるのが嫌なだけだろ。」

「まぁそれも理由だけど…。他にも理由はあるぜ。」

「？」

そう言うと善吉は真剣な顔で紅葉を見る。

「めだかちゃんはお前の言葉を信じて今まで人を幸せにするために頑張ってきた。だったら、言った本人がそれを実行しなくてどうするんだよ？」

人を幸せにするか…。今の俺に出来るのか？いや出来るハズがない、こんな人殺しに…。

「そこまでだ善吉、本人が嫌がるのなら私は無理はさせない。」

「めだかちゃん…。」

「すまなかったな紅葉、だがこれだけは言わせて欲しい。私は紅葉の言葉を信じていて良かったと心から思っている。」

何故そこまで気高くいられる…。何故そこまで輝いていられる…。

「ではこの話は無かった事にしよう。実は早速仕事が入っていてな、それに取り掛からねばならん。」

「待て。」

紅葉がそう引き止めると、ある疑問を聞いてみる。

「何故そこまで人を信じる事が出来る？」

「ふっ、何を言っておる。人を信じる事を教えてくれたのは紛れもなく紅葉、お前だ。」

その言葉を聞いていた紅葉は黙り込む。そして――――。

「ハッ！ハァーハッハッハァ！！！！」

「どうしたのだ？」

紅葉が大笑いした事にめだか達は怪訝に思う。

「ふっ、的外れな答えが返ってきたものだから、おかしくてしょうがなくてな。」

そう紅葉は笑い終わった後ふと考え始める。

こんなに笑ったのはいつぶりだろうか…。赤ん坊の頃に両親と遊んでもらった以来だ…。

「気が変わった。俺もめだかを手伝おう。」

「本当か！？」

「あぁ、ただし生徒会補佐という形で良いな？」

「それでも構わん！これからもよろしく頼むぞ！！」

「紅葉一緒に頑張ろうぜ！」

「あぁ任しておけ。」

こうして新たな生徒会が発足された。

（それにしても入ってきた仕事とは何だ？）

第六話、生徒会補佐（後書き）

次回は初仕事に入ると思います！

第七話、初仕事（前書き）

それではどうぞ！！

第七話、初仕事

～紅葉ｓｉｄｅ～

「それで仕事の内容は？」

「これだ。」

そう言うとめだかは紅葉に紙を手渡した。

『私の飼っている可愛いワンちゃんが行方不明になりました。どうか生徒会の皆さん、私のワンちゃんを見つけて下さい。』

「何だよコレ、普通こんなの生徒会に頼まねーよ。」

「何を言う、私は２４時ｋ「分かった分かった！やれば良いんだろ！？やってやるよ！」よろしい。」

「全く……犬探しは探偵にでもやらせていろ。」

「紅葉までそんな事言うのか？だとしたら私、泣いちゃうぞ！？」

「何故そこで泣くんだ…、気乗りしないが仕方あるまい。」

「ありがとう！」

「抱き付くな。後、顔が近い。」

ハァ…。全く面倒な仕事が入ったものだ。

「その犬の目撃情報は無いのかよ？」

「うむ、時々この学園内で目撃されている。」

目撃されているのなら、何故捕まえんのだ……。

「仕方ねえなぁ、行こうぜ紅葉。」

「あぁ。」

二人は行こうとしたが、ふと紅葉が足を止めた。

「めだかは来ないのか？」

「めだかちゃんはな…。この仕事はダメなんだ。」

「何故？」

「動物に…逃げられるのだよ……。」

めだかはそう言うとｏｒｚのポーズになる。

「そうか…ならば仕方あるまいな行くぞ。」

そして紅葉達は犬を探すべく生徒会室から退室する。

～グランド～

「何処にもいねぇ……。」

「犬が学園内にいるなんてにわかに信じられないけどね☆。」

意気消沈の善吉に不知火が後に続くかのように話す。不知火がいるのは、「面白そうだね！」と言い勝手に付いて来てるだけである。

「そもそもどんな種類の犬なんだよ？」

「確か……。」

そう言うと目の前に謎の物体が現れる。

「グルル…、フシュルルルルルゥゥゥゥ！！！」

その物体はおぞましい唸り声をあげたが、外見で犬だと判断できた。

「「「いた。」」」

いや確かに犬だが……、あれは犬の皮を被った何かではないのか？

「何だよアレ！？どこの肉食獣だよ！！」

「思いだした、確かあの犬はボルゾイと言う種類の犬だ。別名ロシアンウルフハウンド…。」

「ほら！ウルフって入ってんじゃん！！」

しかし犬があんな鳴き声するのか？一体どんな育て方をしていた。

そう紅葉が考えていると、

「こっちに歩いて来たぞ！！どーすんだよ！？」

「じゃあコレ使いなよ。」

ソーセージ…、餌付けをするのか。だがあの犬（の皮を被った何か）に通じるのか？

「おぉ！これで餌付けすれば良いんだな！？」

「んーん違うよ。コレをおなかに仕込んでね、『ぎゃああ！内臓食われたー！・・・と見せかけて実はソーセージでした☆』ってギャグやって欲しいの！！」

してどうなるんだ…。あっ、善吉が死ぬだけか。

「するわけねーだろ！！」

「そうわがまま言わずにねっ☆ほら！もう来てるよ？」

「マジかよ！？あぁ～もうクソっ！ヤケクソだぁ！！」

そして善吉は犬に突撃して行く。

「グキャガァァァァァァァァァァァ！！！」

「ぎゃああ！内臓食われたー！・・・と見せかけて実はソーセー・・・ってマジでぎゃあああっ！！」

「アヒャヒャヒャ！！ステキ！ステキ！人吉君てば超ステキ☆」

「写メを撮っている…。」

善吉よ……、お前の事は忘れないぞ。

「勝手に殺すなぁ……。でももう瀕死だけど……。」

生きていたか、中々タフな奴だな。

「仕方ない、一旦退却だ。」

一旦態勢を整えるため生徒会室へ向かう事となった。

「なるほど…、その行方不明の犬が人を捕食しようとする程凶暴になっていたと。」

「あぁそうだよ。」

不知火を肩車している善吉がそう答える。

「…貴様らのイチャつきは少しばかり腹が立つ。まぁ私には紅葉がいるから良いのだがな。」

「抱き付くなと何度言えば分かる……。」

「にしても、何か良い作戦はないのかよ？」

「問題ない、私に任せておくが良い。」

「大丈夫なのか？お前は動物に嫌われているんだろ？」

「ふっ、まぁ見ておけ。」

数十分後3人はまた先ほどのグランドにいた。

「作戦って何だろな？」

「さぁな。」

アイツの事だ、それなりに良い作戦が思いついたんだろう。

「待たせたな。」

やっと来たk…って――――、

「さぁワンちゃんは何処にいるのだ！？」

そこには犬のきぐるみの頭から顔を出しためだかがいた。

「何をしている？」

「演劇部から拝借してきた。この着ぐるみであのワンちゃんと仲良くなる作戦だ！」

コイツは本当に頭が良いのか？悪いのか？

「…ねぇ人吉。このお嬢様ってひょっとしてさぁ……」

「あ、気づいた？うん。一週回って基本バカだよ」

「やはりバカか……。」

「貴様らは何故この作戦の素晴らしさが分からん！？もうよい！そこで指を咥えて見ておれ！！」

そう言うと意気揚々と犬へ足を進める。

「さぁ～怖くないぞぉ。私はお前の仲間だぞぉ～。」

「キャイン！キャイン！！」

しかし犬はめだかが近づくと情けない鳴き声をあげ、紅葉の足へと隠れてしまった。

「何故だ……。」

「そう落ち込むなめだか。依頼は達成、おお手柄だ。」

「私はただ仲良くしたかっただけなのに……。」

これはダメだな…。慰めの言葉を入れた方が良いな。

「元気をだせ。ほら、その着ぐるみ姿は中々似合っているぞ？」

「……本当か？」

「あ、あぁ…。」

「ウェェ～ン、紅葉ぉ～。」

「だから抱き付くなと……いやもう諦める。」

とりあえずめだかが泣き止むまで頭を撫でておく事にした。

～翌日～

「何はともあれ依頼達成だ。みんな感謝する。」

「そうだな。しかし、この花は何だ？」

「うむ、これからは依頼が達成する度に花を飾る事にした。花を飾るのは善吉の仕事だ。」

「オッケー。」

「さぁ我々に休む暇など無いぞ！もう次の依頼が来ている。」

「内容は？」

「どうやら剣道部の素行が悪いらしい。改善しなければならない。」

「分かった。」

めだかと善吉は剣道部の活動場所へと向かって行った。

「素行が悪い…か、久しぶりに暴れるか。」

紅葉はニヤリとした顔になり後へ付いて行った。

第七話、初仕事（後書き）

ＰＶが１万目前となり、ユニークも１５００以上行きました！

皆さん僕の小説をこんなにも読んでいただきありがとうございます

ｍ（　）ｍ

これからも宜しくお願いします！！

第八話、紅葉の実力（前書き）

紅葉がちょびっとだけ暴れます。

第八話、紅葉の実力

～剣道部員ｓｉｄｅ～

ありえねぇ……、この大人数で負けるとか…。

「クッソ～、ボロボロだぜ…。」

「何だよアイツ化けモンかよ！」

「うわっ！鼻血止まんねぇよ！！」

俺達は腐っても剣道部員のハズだ。なのにあんなど素人に！！

「にしても、アイツ強かったな。」

「ホントだよ。あーぁ、何かスゲー悔しいな。」

「俺もだよ。」

いつ以来だろうか？こんなに悔しい気持ちが出てきたのは。

「……俺真面目に剣道するよ。」

「俺もする！負けたままなんて嫌だからな！！」

その後も他の剣道部員がそれに賛同する。

「へっ、俺だってアイツには勝ち逃げなんかさせねーよ。」

「もう一回みんなで頑張ろうぜ！！」

「へぇ…、先輩達みたいなのが出来るとは思えませんけどね。」

その言葉に剣道部員達が怒りだすが、

「んだと!?誰だテｍ……。」

「さっきまで不良気取りの先輩達が出来るわけないじゃないですか。」

コイツは剣道部の中でも剣道の腕が五つの指に入る程の……、

「ひ…日向……。」

～剣道部員ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～紅葉ｓｉｄｅ～

「この依頼は俺に任せてくれないか?」

「何故だ?３人行けば良いだろう。」

「まぁな…。だが、その間他の依頼でも片付けておけば良いだろう。」

「ん～、だがなぁ…。」

「良いんじゃねーの？その方が他の依頼片付けれるし。」

「むぅ…、だが紅葉一人で大丈夫なのか？」

「心配には及ばん。」

そう心配はいらない。というか、負ける要素が見当たらんからな…。

～剣道部活動場～

「失礼する。」

「あん？誰だよテメー…。」

「生徒会の者だ、剣道部員の素行が悪いと聞いて来た。」

「はい？俺達は真面目なんですけどねぇ。」

しかしその生徒の口にはタバコが咥えられていた。

「そういう事だ。少しお前らを改心させなければならん。」

「……調子に乗ってんじゃねーよ！！」

剣道部員が紅葉に右ストレートを放つ。しかし――――、

「ウラァ！！」

紅葉の右ハイキックが部員のこめかみに炸裂する。部員は壁まで吹っ飛び呆気なく気絶してしまった。

その光景を見ていた他の部員が、

「こ、この野郎っ！」

「ぶっ潰しちまえ！！」

部員が紅葉に襲いかかる。

久しぶりの運動だ…。少し遊んでやるか。

そう考えると近くにあった竹刀を取り、

「ウガッ！」

「グヘァ！！」

「アベシ！！！」

周りいた部員達を一瞬で一掃する。

「ふん、雑魚すぎる。」

やはりウォーミングアップにもならなかったか…。

「これ懲りたら大人しくしておけ。」

「ま…、待て…！」

これで依頼は達成だな。楽過ぎはしないか？

その数時間後、紅葉はめだか達に会い依頼が達成したのを報告し帰ろうとした最中、

（尾行されているな…。）

剣道部員の連中か…？いや、アイツらは無いな。

「良いだろう……。」

そう言うと紅葉は校舎裏まで誘導するように歩いた。

～紅葉ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～？ｓｉｄｅ～

「どこに行こうとしてるんだ？」

あの桜島紅葉とか言う男、本当に一人で剣道部を制圧したのか？

「ん？また曲がるのか。」

紅葉を尾行している人物が後を追うが、

「なっ、いない！？何処にいる！！」

「ここだ。」

「後ろだと！？だが、どうやって…？」

「簡単な事だ。俺が曲がった時に高くジャンプをして、お前の後ろに着地しただけだ。」

マジかよ…、本当に人間かよ。

「そんな事より、誰だお前…。」

「チッ、仕方ねーな…。」

そう言うと紅葉の方へ振り向く。

「俺は日向だ、お前と同じクラスのな。」

～日向ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～紅葉ｓｉｄｅ～

「日向？」

「あぁ、そうだよ。」

日向……。俺のクラスにそんな名前の奴いたか？

「俺は日向なぞ知らん。」

「はぁ！？嘘だろ！！？？」

「本当だ。」

「ぐっ、…まぁいい。俺は日向、剣道部に所属している。」

「何？」

さっき叩きのめした剣道部にはこんな奴いなかったが……、

「さっき先輩達を潰したのお前だろ？」

「…だったら何だ。」

「別に何もしねーよ。でもな…。」

そう言うと自称同級生が竹刀を取り出す。

「俺と勝負しろよ。」

「良いだろう。」

「あれ？案外物分かりが良いんだな。」

「黙れ、さっさと来い。」

「んじゃ、遠慮なく！」

日向が紅葉に向かって突きを放つ。

「言い忘れたけど、この勝負は気絶した方の負けだぜ！！」

「上等！！」

紅葉は軽く突きをかわす。

「まだまだぁ！！」

そう言って日向が追撃するが、紅葉は涼しい顔をして全て避けてしまった。

「下らん…、少しハンデをやろう。」

そして俺は両目を閉じる。それでも全て避ける。

「なっ！」

「これでもダメなのか？とことん雑魚だな…。」

「クソがぁ！！」

激怒した日向が竹刀を上から振り下ろすが…、

「もういい…。」

そう言うと日向の頭を掴み力任せに地面に叩きつける。

頭が地面にめり込んでシュールな光景であるが、された側はたまった物ではない。

「死なない程度に加減した、…たぶんな。」

「……。」

数時間後……、

「おーい！誰か抜いてくれー！！」

この後、日向が剣道部員に助けてもらったのはまた別の話で…。

第八話、紅葉の実力（後書き）

普通死にますね…。

次回をお楽しみに！

閑話?、普通の高校生になるために…ｐａｒｔ２（前書き）

フラグなのか？

作者も分からん（笑）

閑話?、普通の高校生になるために…ｐａｒｔ2

～紅葉ｓｉｄｅ～

「コイツもないな…。」

これだけのグラビア雑誌だ。どれかは当てはまると思ったのだが…。

「あの～、3人を代表して一つ質問良いか?」

「何だ善吉?」

「グラビア雑誌なんか漁ってどうするんだ?」

「そんなもの決まっている、普通になるためだ。」

「いや真顔で言われても……。」

「もしかして好きなアイドルとかいるの?」

古賀がそう聞くが、

「いるハズがないだろ。」

「ですよね～。」

「だったら別に良いじゃねーか、いないままで。」

「ダメだ。高校生は気になる人が一人いるのが普通らしいからな。」

「「へ？」」

その言葉に古賀と名瀬はキョトンとする。

「いやいや、別にいなくても普通だと思うよ？」

「あぁ普通だ。」

「何！？」

どういう事だ！？ならあの言葉は…、

『普通の高校生は気になる人が一人いてもおかしくねぇぞ？』

「善吉！どういう事だ！？」

「いやぁ～…、あれは言葉の綾と言いますか…。」

目が泳ぎまくってるぞ善吉…。

「もういい…、ならこれ（グラビア雑誌）には用はない。」

「一つ思ったんだけど、お前の好みのタイプってなんだよ？」

「好みのタイプ？」

俺の好みタイプ……、一つも思い浮かばん。

（まぁ…仕方ないか。今まで恋愛とは無縁の生活をしていたしな。）

そんな事を思っていた。実際は、紅葉は前の学校ではかなりモテていた。しかし、紅葉はその事に全く気づいていなかったのだ。

俗に言う『朴念仁』と言うものである。

「その様子だと無いみたいだな。」

「もったいないねっ、中々のイケメンなのに。」

何故か知らんが褒めれた…。これは此方も気の効く事を言った方が良いな。

「アンタは可愛いと思うぞ？愛嬌がある。」

「ふぇぇ！？／／／」

「ここで口説いた！？」

別に口説いた訳では……。後、何故古賀の顔が真っ赤になっている？

「か、からかわないでよ！な、名瀬ちゃん帰ろ！」

「古賀ちゃん…、顔真っ赤だぜ…。」

「真っ赤じゃないよ！もういい！」

「あっ、待てよ古賀ちゃん！悪かったってー！」

古賀と名瀬が慌ただしく本屋から去って行った。

「何だったんだ…？」

「お前よくあんな恥ずかしいセリフ言えるよな…。」

「？思った事を言ったまでだが。」

「これもイケメンの特権か……。」

「…まぁ次いでにこの本を買うか。」

「何だよそれ？」

紅葉が買おうとしていたその本は――――、

『あのジョンス・リー監修！超簡単な八極拳！！』

「スゲー本だな……。」

～紅葉ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～古賀ｓｉｄｅ～

恥ずかしい！あんなセリフ真顔で言われるなんて！？

『アンタは可愛いと思うぞ？愛嬌がある。』

思い出すだけで顔が熱くなる…。こんな顔見せれないよ。

「古賀ちゃーん。探したｙ……って顔赤っ！？」

早速見られたよ…。

「うぅ、あんま見ないでよぉ…。」

「わ、悪い。でもあんな臭いセリフよく言えたよな。」

「本当だよ…。」

「もしかして古賀ちゃん、そういうのに耐性無い？」

「恥ずかしながら……。」

あんな臭いセリフ初めて言われたよぉ。

「まぁ向こうも本気じゃないと思うぜ？」

「う、うん…。」

今日の事は早く寝て忘れる事にしよう。

～古賀ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

その後、放課後に起きた『古賀ちゃん口説き（？）事件』が何故かめだかに露呈し、紅葉は小一時間問い詰められる事となる。

（…おそらく善吉の仕業だな。）

紅葉は心の中でそう嘆いた。

閑話?、普通の高校生になるために…ｐａｒｔ２（後書き）

ヒロインは誰にするかまだ決めていません。

「この人が良い」って言う人は良ければ意見をください。

第九話、天敵（前書き）

短めです。

第九話、天敵

～紅葉ｓｉｄｅ～

「何処だここは？」

確かソファーで転寝をしてしまって、気づいたら見知らぬ場所に…。

しかし紅葉には見覚えがあった。今自分がいるこの場所に。

「教室？」

「その通りだよ、ここは教室だ。」

「誰だ！」

「そう殺気を出さないでくれ、君と争う気はないよ。」

そう言って黒板の前に女性が現れた。

「僕の名前は安心院(あじむ)なじみだ。僕のことは親しみを込めて安心院(あんしんいん)さんと呼びなさい」

「何のつもりだ…。」

「何、君という人物に会っておきたくてな。『腑罪証明(アリバイブロック)』を使わせてもらった。」

どうやら眠っていたせいか、俺の過負荷が上手く作用していなかったのか…？

だが今なら作用する、さっさと帰るとするか…。

「じゃあな。」

「まぁ待ってくれ。」

そして安心院が紅葉に近寄る。

「君の能力に興味がある……。ぜひ欲しいよ。」

「ふん、それが狙いか。」

「安心してくれ、他の能力をあげるから。」

「悪いがこれで間に合っている。」

だが安心院が目の前まで移動していた。そして顔を近付ける。

「じゃあ頂くよ…。」

「断る。」

唇と唇が付きそうになる前に安心院の顔を掴む。

「……ひゃふぇふぇくへぇひゃひか（やめてくれないか）？」

「何故キスをしようとした？」

「僕の能力『口写し（リップサービス）』で、スキルの授受をしようとした。」

「やめておけ、ただのキスになるだけだ。」

「本当かい？」

「あぁ。」

しかし、この女どうして俺の能力を知っている？

「……最高だ…。」

「は？」

「君の能力、ますます欲しくなったよ！」

「……。」

「とはいえ、確かに君の能力を頂くのは至難の業だな。」

「なら諦めろ…。」

「それは無理だ、これ以上天敵を増やしたくないからね。」

「天敵？」

俺がコイツの天敵？別に争う気はないのだが……。

「何故お前と殺り合わなければならない。」

「ふむ、信じて良いのかい？」

「あぁ…。」

二人の間に沈黙が生まれる…――――、

「良かったよ…、君が良い人で。」

「そうか、それじゃあ帰るぞ。」

「ま、待ってくれ。」

まだ何かあるのか…、早く帰りたいのだが。

「君とは仲良く出来そうだ、これからも友達でいようじゃないか。」

「悪いがお前の事は信用出来ない。」

「もう能力を奪おうとはしないよ、安心したまえ。安心院(あんしんいん)だけに。」

「……チッ」

「…今舌打ちしたね？」

「じゃあな。」

そう言うと紅葉は自らの過負荷を使い、その場からきえる。

～紅葉ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～安心院ｓｉｄｅ～

「無愛想だが悪い人ではないな…。」

久しぶりに人と話した気がする。少しだけ心が軽くなったかもしれない…。

「困った事があれば助けに行くよ、友達だからね…。」

そうだな…、友達は大切にしなくては。

「さてと、今度はちゃんとウケるギャグを考えなくては。」

待っててくれ…、次会った時は抱腹絶倒させてあげよう。

第九話、天敵（後書き）

意見を下さったアクセルロイさん、WKさん、スノウさんありがとうございます。

これからもよろしくお願いしますm（__）m

第十話、天才ｖｓ化物（前書き）

阿久根戦です。

戦闘描写って書くの頭使います……。

第十話、天才ｖｓ化物

～紅葉ｓｉｄｅ～

「今日はどんな依頼が来てんだ？」

「今日は柔道部から来ている、何でも柔道部の今後に関わる事らしい。」

「そりゃ大事じゃねーか。早く行こうぜ。」

柔道部か、一体どんな厄介事を持ち込んだんだ？

～柔道場～

「いらっしゃい！待ってたで生徒会のみなさん！！」

「鍋島三年生、本日はどういったご用件で？」

「うん。実はウチ柔道部の部長なんやけど…、もう引退せなあかんねん。」

そして鍋島はめだかの肩を掴みだす。

「そこでや！部長を引き継いでくれる部員探しを手伝ってくれへんか？」

「良いだろう鍋島三年生！この黒神めだか、全身全霊をもって手伝いましょう！！」

「ホンマに！？恩に着るわぁ。んじゃ、早速部員達と戦ってもらうわ！」

数分後……、

「さぁ来い柔道部諸君！私を倒し見事部長になってみせよ！！」

「ノリノリじゃねぇか。」

「しかしあれでは意味が無いぞ。……部員達が全く歯が立たないじゃないか。」

紅葉の視線の先には、めだかが柔道部員達をいとも簡単に投げ飛ばしている姿だった。

「う～ん…、やっぱり黒神ちゃんには勝てれへんかぁ。」

「どうするんだ？このままでは部員の自信が削ぎとられるだけだぞ。」

「どないしよか？」

「……俺に聞くな。」

「ん？君達は…。」

そう言うと金髪の男子生徒が歩いて来る。

「二年生の阿久根高貴君やで。」

「阿久根だ。君は？」

「……桜島紅葉。」

「桜島君か、よろしく。で、横にいる男が。」

「…お久しぶりっス。」

「そうだな、久しぶりだね。」

何故こんな険悪なムードなんだ？というか知り合い成る程…、簡単にいうとめだかを奪い合っている仲というか訳か。

一人盛大に勘違いしている紅葉はそんな光景をボーッと見ていると、

「せや！ええ事思いついたで！」

「どうしたんですか？」

「うん。部長についてやけど、阿久根クンが勝ったら生徒会に入り人吉クンが負けたら柔道部に入ってウチの柔道の部長になる。どない？」

「アンタまさか今までずっと考えてたのか？」

「？。うん、そうやけど？」

部員の喧嘩を止めなくて良いのか…。まぁそんな事気にする奴には思えんが。

「まさか鍋島先輩それが目的で？」

「あ、バレた？まぁええやん。人吉君みたいながんばり屋さんがウチはめっちゃ好きなんよ！」

これが今世間で噂になっている『リア充』なるものか…。やるな善吉よ。

「紅葉…お前何か色々と勘違いしてないか？」

「気にするな。」

「じゃあ早速黒神ちゃんに相談してくるわ！」

そう言うと鍋島がめだかに向かって行く。

「良いでしょう！誰からの相談でも誰からの挑戦でも受け付ける。どんな内容でや条件でも、如何に困難で理不尽でも享受する！それが箱庭学園生徒会執行部だ！！人吉善吉、私は貴様に負けるなとは言わん。しかし逃げることは許さんぞ！！」

まぁ面白いのならそれで良いか、善吉には悪いが。

数分後、善吉と阿久根は柔道着に着替え対峙していた。

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式や！無制限十本勝負対無制限一本勝負！阿久根君に十本取られるまでに一本でも取れたらジブンの勝ちや人吉君！」

二人が互いに頷く。

「それでは始め！！」

鍋島がそう言った瞬間、善吉が阿久根の襟を掴むが――――、

『ズドン！！』

善吉は綺麗に一本背負いされていた。

（簡単に決められたな、これは勝てるかどうか…。）

その後も阿久根は次々と勝ち数を増やしていった。

「さっすが阿久根君、綺麗な一本やな～。後の先取らせたら右に出るモンはおらんわ。ホンマ天才的で……つまらん柔道や。」

「どうやらずいぶんと天才がお嫌いなようだな鍋島三年生。」

「うん嫌いやで、大嫌いや。黒神ちゃんも阿久根君のこともな。才能を努力で踏みにじりたくてウチは柔道をやっとんのよ。」

ずいぶんな物言いだな…。まぁ確かに俺もある意味で天才は嫌いだが。

「安心しろ鍋島三年生、天才などいない。」

「……へ？」

そう言うとめだかは一歩前に出る。

「善吉！いつ如何なる場合においても決して私は貴様に負けるなとは言わん。だから勝って！！」

そしてめだかは少し涙目になりながら、

「貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ！困るぞ！泣いちゃうぞ！！」

……善吉も苦労しているな。しかし、こうも人は変わるものなのか？

そう思っていた矢先、善吉が阿久根の両足を持ち上げて倒した。双手刈りというものだ。

「信じられへん…。阿久根君にホンマに勝ってしもた。いや、それより双手刈りならウチもよう使うけど人吉君はあんなにも綺麗に……。」

「鍋島三年生、私は天才などではない。善吉と紅葉がいるお陰で生徒会をしていける。私もただの凡人に過ぎない。」

めだかがそんな事を思っていたとはな…。

「むぅ～、じゃあ桜島君くれへん？」

「何？」

「さっきの阿久根方式で構えへんやろ？」

「良いだろう…。紅葉やっくれるな？」

「勝手にしろ……。」

まぁ大体予想はしてたがな……。だが、いざやるとなると面倒だ。

「じゃあ阿久根君お願いなぁ。」

「……分かりました。」

さっきの敗戦のショックから立ち直った阿久根も了承する。

「柔道着に着替えくる、少し待て。」

数分後、紅葉と阿久根が向かい合っていた。

「ルールはさっきと同じやで。それでは……始め！！」

「悪いが即刻で終わらせてもらう！」

阿久根が掴み掛かるが――――、

「ふん…。」

次の瞬間、紅葉の姿が消えてしまう。

「なっ、消えた！何処に行った！？」

「こっちだ。」

「「「「！！？？」」」」

その言葉に４人が驚く。それもそのはず、消えた紅葉が阿久根の背後に現れたのだから。

「ぐ、いつの間に…！」

「驚いている暇など無いぞ。」

そう言うと紅葉は、ものすごいスピードで阿久根を掴み一本背負いする。周りから見れば、いつの間にか阿久根が投げ飛ばされていたにしか見えなかった。

投げ飛ばされた阿久根は目を白黒させ、他の3人は唖然としていた。

「終わりだな？帰らせてもらうぞ。」

紅葉は他のみんなを置いていき柔道場から出ていった。

翌日、紅葉と善吉は生徒会室に向かっていた。

「まさかお前があんなに強いとは思わなかったよ。」

「そうでもない、ただ喧嘩慣れしているだけだ。」

「いや、アレは喧嘩じゃなくて柔道な。」

ドアを開けるとそこには身だしなみをチェックしている阿久根がい

た。

「……何故アンタがいる？」

「ん？あぁ二人とも来てたのか。なぁに、答えは単純だ。」

阿久根は善吉を見据える。

「君を追い出すのは諦めたが、俺はめだかさんを諦めたわけではないのでな。それに鍋島先輩に退部勧告をされてな。それに……。」

「「それに？」」

「鍋島先輩に言われたんだ、『その努力と根性で惚れた女一人ものにしてみんかい！』ってね。」

これは応援しているのか？それともただの厄介払いなのか？どっちなんだ鍋島……。

「と、いうことで。本日付で生徒会執行部『書記』に任命されたニ

年十一組、阿久根高貴だ。よろしくお願いします、先輩！」

こうして現在の生徒会は阿久根を新しく入れ、４人（？）となった。

第十話、天才ｖｓ化物（後書き）

ヒロインはもしかしたら古賀になるかも……？

まだ決めてないですけどね。

第十一話、紅葉恋愛相談所？（前書き）

閑話？に誤字がありました（泣）

「褒められた」を「褒めれた」にしていました、ご了承を…m（＿＿）m

第十一話、紅葉恋愛相談所？

ラブレターとはご存知だろうか？

それは、気になっている相手に対して自分の気持ちが書いてある恋文の事である。

しかし、そのラブレターを渡せずじまいで恋が終わる者も少なくない。

そんな甘酸っぱい悩みを持つ生徒が生徒会に相談を持ちかける。

～八代ｓｉｄｅ～

八代三年生は生徒会室の前にいた。そう、彼女もラブレターについてある悩みを持っていた。

何時でも相談して来いって言ったよな。でも、後輩に恋愛相談とか恥ずかしいな…。

「ええい！どうにでもなれ！」

そうして八代が勢いよく開けると―――、

「成る程…、ここはそうするのか。」

そこには中国武術によくありそうな動きをしている男子生徒がいた。

「……間違えました。」

見なかった事にしよう…。やっぱり最初から友達に相談するべきだったよ。

そう思い出て行こうとしたが、

「ん？相談者か、ゆっくりしていけ。」

「うえ！ちょっと！？」

その男子生徒は八代の後ろ襟首を掴むと来客用の椅子まで連れていく。

「生憎、生徒会長は今留守にしている。そこで待っていろ。」

「なんて横暴な…。」

そう言うと男子生徒は、また中国武術のような動きをする。

「最高級に気まずい……。」

八代は生徒会室に来た事を猛烈に後悔した。

～八代ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～紅葉ｓｉｄｅ～

「ふむ、こんなものか。」

やはり、あの時買った本は正解だったな。これのおかげで大分理解する事が出来た。

《あの本とは閑話？で紅葉が購入したものです。》

そう言えば…、さっきから何故あの女は気まずそうにこちらを見ている？

「……。」

（しかしめだか、遅すぎるぞ…。とりあえず内容だけは聞いておくか。）

やれやれと、思いながら女子生徒に問いただす。

「で、今日は何のようだ？」

「えっ、でも黒神さんいないじゃん。勝手にやって良いのかよ？（いきなりでびっくりした…）」

「構わん、こう見えても生徒会の端くれだからな。それで何の用だ？」

「…じゃあ……、言わせてもらうよ。」

八代が言おうとしたが、不意にドアが開く。

「桜島君、来てたのか。」

「阿久根さんか。」

紅葉は一応年上と話す時は『さん』付けをしている。そうしないと生意気だと言われ、この前に先輩に絡まれたからである（当然返り討ちにした）。

「おや、もう相談者が来ていたのか。」

「あぁ、じゃあ…早速内容を教えてくれ。」

「わ、分かった…。」

そう言うと八代は説明し始めた。

「実はラブレターを書きたいｎ「書けばいいだろ。」いや最後まで聞いてくんない！？」

八代がプロ顔負けの突っ込みをすると、続きを話す。

「ラブレターを書こうにも字がヘタクソなんだよ。ほら、アタシずぼらな性格だし。」

いや知るわけないだろ……。

「だからどうしたら良いか教えてくんない…？」

「こういうのはどうでしょう？、僕が代わりにラブレターを書きましょう。そうすれば、字が下手なのは隠す事が出来ます。」

『代わりにラブレター書きましょう』だと？馬鹿げてるな…。そんなものコイツの為にならんぞ。

「それ良いねぇ、じゃあ早速頼むよ！」

そう言うと二人は集中しやすい図書室へ向かった。数分後、めだかが生徒会室へ入って来た。

「うん？まだ紅葉しか来ていなかったのか。」

「さっきまでな。」

「誰かいたのか？」

めだかがそう聞くと、阿久根が生徒会室へ帰って来た。

「すまない、忘れ物をしてしまった。おや、めだかさん。」

「ちょうど良い、アイツに聞け。」

「そうだな。阿久根書記よ、私がいない間に何があったのか報告を要求する。」

「分かりました。まず――――、」

それから阿久根が今までの経緯を話す。

「どうでしょう！？僕の方法は？」

「…がっかりだ。」

「え？」

「貴様には失望した、もう何もしなくていいぞ。」

そう言うとめだかは生徒会室から出て行った。

当然の結果だろうな。まぁ…阿久根にしては最悪の結果だがな。

「何故…何故なんだ……？」

（……チッ、仕方ない。）

ここは阿久根の為に一肌脱いでやるとするか…。しかし俺も丸くなったものだ。人に対して気を遣うなんてな……。

そう思うと紅葉は図書室へと向かった。

～紅葉ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～八代ｓｉｄｅ～

「遅い……。」

どういう事だよ！？女を待たせるなんて仮にもアタシはレディだぞ！！

「やはりここか。」

「あっ、さっきの…。」

アイツは生徒会室にいた中国武術の人だ…。何でここに?

「先に言っておこう、阿久根は来ないかもしれんぞ。」

「えっ、なっ何でだよ!?」

「生徒会長に戦力外通告を受けたのでな。今はショックで動けん。」

「そうだったのか…、じゃあ代わりにお前書いてくれよ。 」

この際この人でも良いや、アタシの字の下手さに勝てる人なんていねぇし……。

だがそれを聞いた紅葉はため息を吐いた。

「それでお前は良いのか？」

「どういう意味だよ…？」

「では言い方を変えよう。お前は自分のラブレターを他人に書かれても良いと思っているのか？」

「それは！その……。」

確かにあの時は他の人に書いてもらえば良いと思ってた。でも、冷静に考えてみると……。

「嫌だろうな、それはそうだ。お前がもし逆の立場ならどう思う？」

そんなの…そんなの……ムカつくに決まっている！

「ムカつくよ…、所詮アタシに対する気持ちはそんなものかってね。」

「だろうな、結局は軽い気持ちだったんだと思われるだけだ。……それでどうする？」

どうするかなんて…、やる事はこれしかないだろ。

「字を上手く書けるように練習するよ。」

「ふっ、まぁ…頑張るんだな。」

素直じゃないねぇ、楽になれば良いのに。

「では帰らせてもらう。……一つ言い忘れていた。」

「何？」

「阿久根の事は許してやってくれ、アイツなりにお前の願いを叶いさせたかっただけだ。」

「そんなの…全然悪く思ってないよ。」

「…そうか。」

そうして紅葉は図書室から退室した。

「不思議な奴…。」

年下なのにどこか説得力があって貫禄があった…。でも、アイツのおかげで本当にやるべき事が分かった！

「よ～し！頑張るぞ！！」

「図書室では静かに！」

「…すいません……。」

受付に注意されテンションが下がった八代であった。

～八代ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～紅葉ｓｉｄｅ～

とりあえずあの女はひとまず大丈夫だろう。だが、字を練習するなら講師がいるな……。

「後は阿久根か…、世話の焼ける先輩方だ。」

紅葉は阿久根がいるであろう生徒会室へ歩く。

第十一話、紅葉恋愛相談所？（後書き）

人の心の描写ってムズいです。

というより小説を書く事自体ムズい……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1448z/

普通でありたい過負荷な異常者

2011年12月16日18時25分発行